

活動報告書

報告者氏名：佐野 将大 所属：香川県立高松養護学校 記録日：平成 26 年 2 月 17 日

【対象児の情報】

- ・ 学年 小学5年生男子
- ・ 障害名 肢体不自由（脳性まひ）、視覚障害、知的障害
- ・ 障害と困難の内容

①児童の実態

ア) 発信

- ・ 「あ、ば、だ」が言える
- ・ 泣いたり叫んだりすることで訴えることがある
- ・ 人から質問されると「あ」と答えてしまう

イ) 受信

- ・ 一語文でなおかつ具体的な物の名称理解が可能
- ・ 聴覚が優位

②家庭でのコミュニケーションの実態

ア) 保護者の実態

- ・ たくさんの言葉で児童に話しかけてしまう
- ・ 児童の発声や感情に対して深読みしたり先読みしたりしてしまう
- ・ 泣いたり叫んだりすることへの対応の方法や、それを事前に避ける方法が分からない

イ) 児童の実態

- ・ 母親が相手の時に泣いたり叫んだりすることが増える

【活動目的】

・ 当初のねらい

ねらい1・・・主体的に意思を伝えるために人を呼ぶ方法をより適切なものにする

ねらい2・・・選択し意思を伝える方法をより適切なものにする

ねらい3・・・児童と保護者ともに分かりやすくコミュニケーションをとりやすい環境づくりを進める

・ 実施期間 平成 25 年 5 月～

・ 実施者 報告者（担任）、自立活動専任教員、保護者、保護者が参加する勉強会のメンバー（保護者／教員）

【活動内容と対象児（群）の変化】

・ 対象児の事前の状況

ア) 泣いたり叫んだりしてしまう場面の実態把握

家庭でのコミュニケーションの実態を把握するために、記録表を用いて保護者に「児童が泣いている場面」を記録してもらうこととした。Table.1 にその際活用した表とその一部を示す。

Table.1 家庭でのコミュニケーション実態把握のための記録表（泣く場面中心）

日付	時間	場所	相手	シチュエーション	切り替えのきっかけ
9/X	7:00	寝室	母	目覚め後叫ぶ、そのまま寝室→リビングへ移動 DVDを再生する 笑い始める	DVDが始まる

保護者に記載してもらった1ヶ月間の記録を整理したもの (Fig.1、Fig.2)、また記録をもとに復習評価者で児童が泣く理由をリストアップし整理したもの (Fig.3) が以下の通りである。

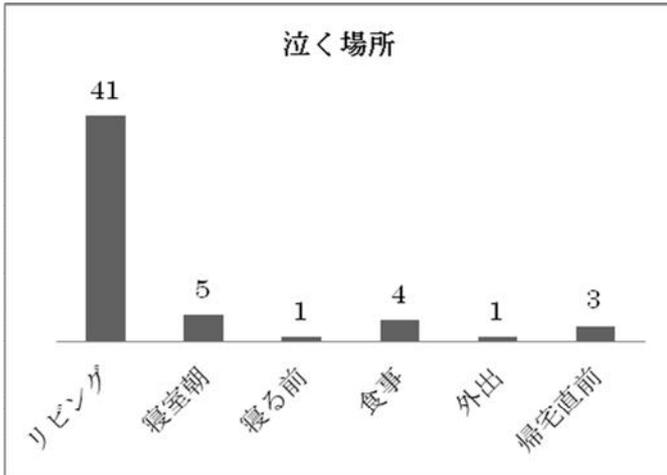


Fig.1 泣く場所の整理結果

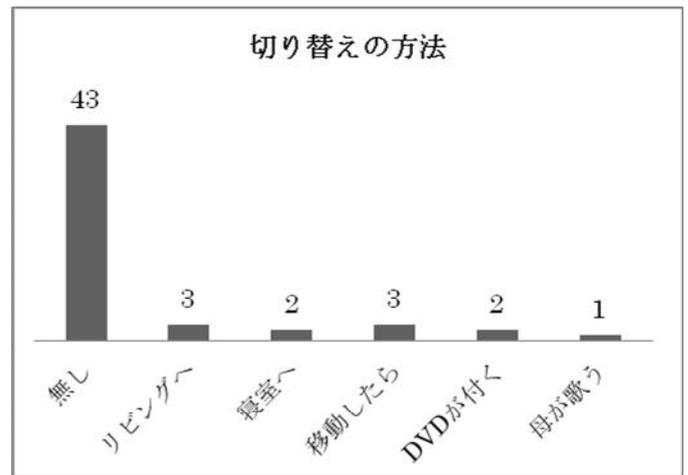


Fig.2 切り替えの方法の整理結果

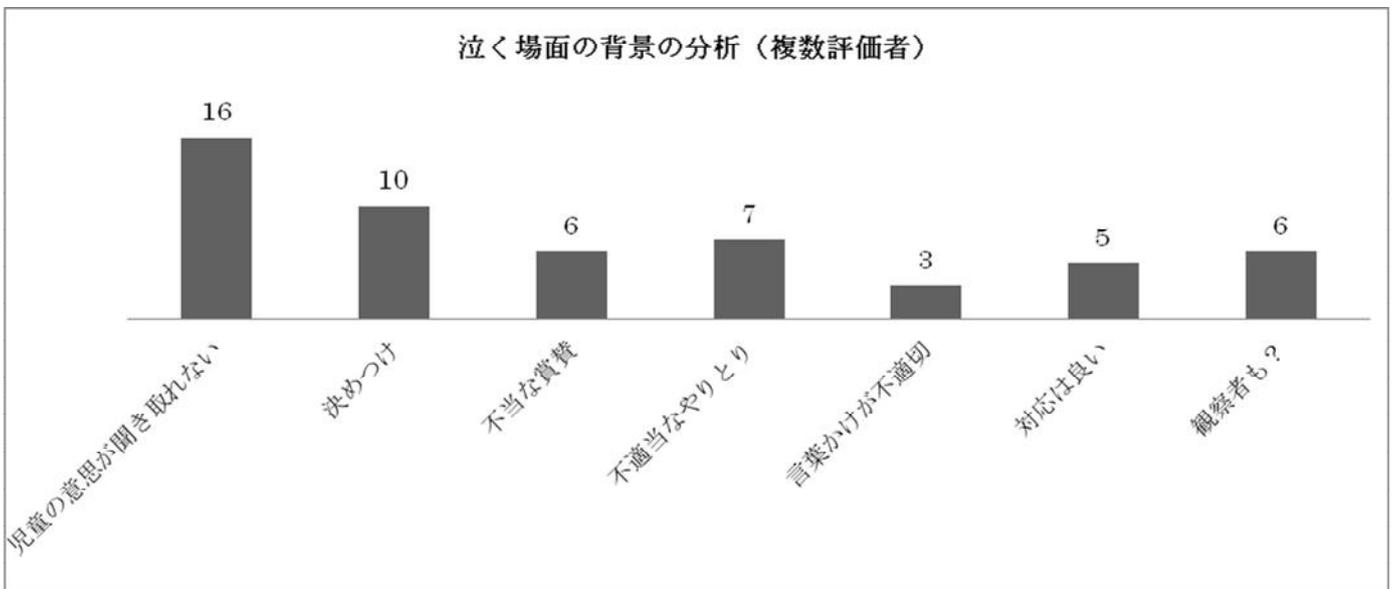


Fig.3 泣いてしまう理由として考えられる原因の分析結果

イ) 結果を受けて

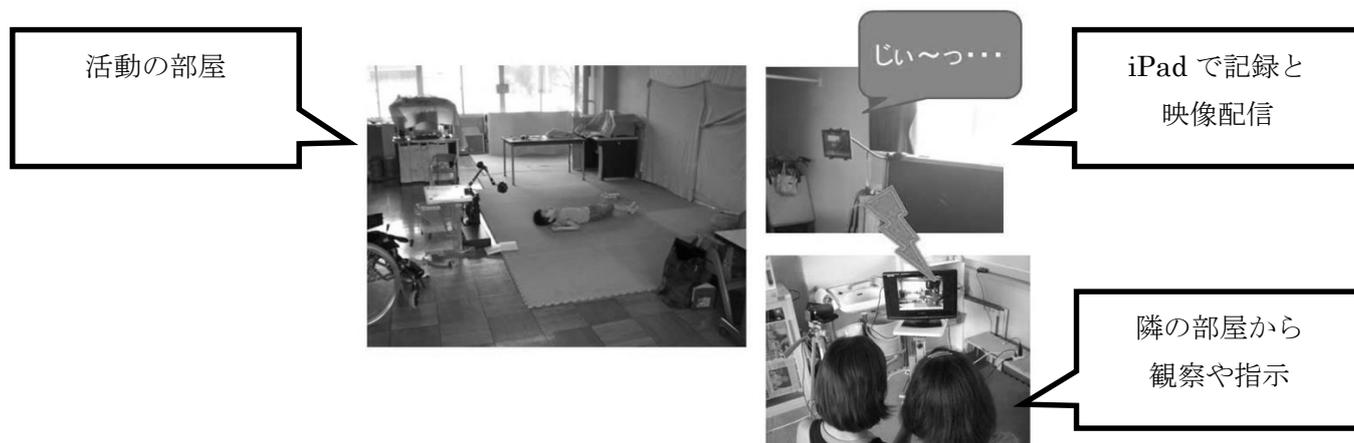
- ・泣いてしまう場面が多い「リビング」での過ごし方を中心に取り組みを始めることとした。
- ・「意思が聞き取れない」ことを改善するための方法を模索することとした。
- ・「言葉かけが不適切」という項目を受けて、生活場面での「簡易な語彙理解度チェック」を行った。

・実施した活動の全体像

	時期	内容
①	7月～8月	泣いてしまう場面などでの保護者の対応方法の練習
②	9月	生活場面での簡易語彙理解度チェックの実施
③	10月	『どうして理解できる方法で児童に伝えなければならないのか』テキストの作成
④	10月～11月	過ごしやすい環境づくりの促進
⑤	11月	聴覚を活用して選択することができるための「ショートムービー」の作成と施行

【活動①】泣いてしまう場面などでの保護者の対応方法の練習

対応の方法が分からないという保護者の主訴をもとに、実地的な練習を行った。練習場面と観察場面を分け、iPadのミラーリング機能を活用して別室に映像を映しながら実施した。



活動時における児童と保護者の行動を、ビデオ観察で計測した。何度も繰り返し起こる行動は、述べ回数として計測している。レイアウトを変えていくに従って、「保護者の先読み」が減少している。これは、「保護者が児童に応答」が増えてきていることと関係があると考えている。つまり、先読みして判断する方法から、児童の発信を待つ方法に移行してきているということである。

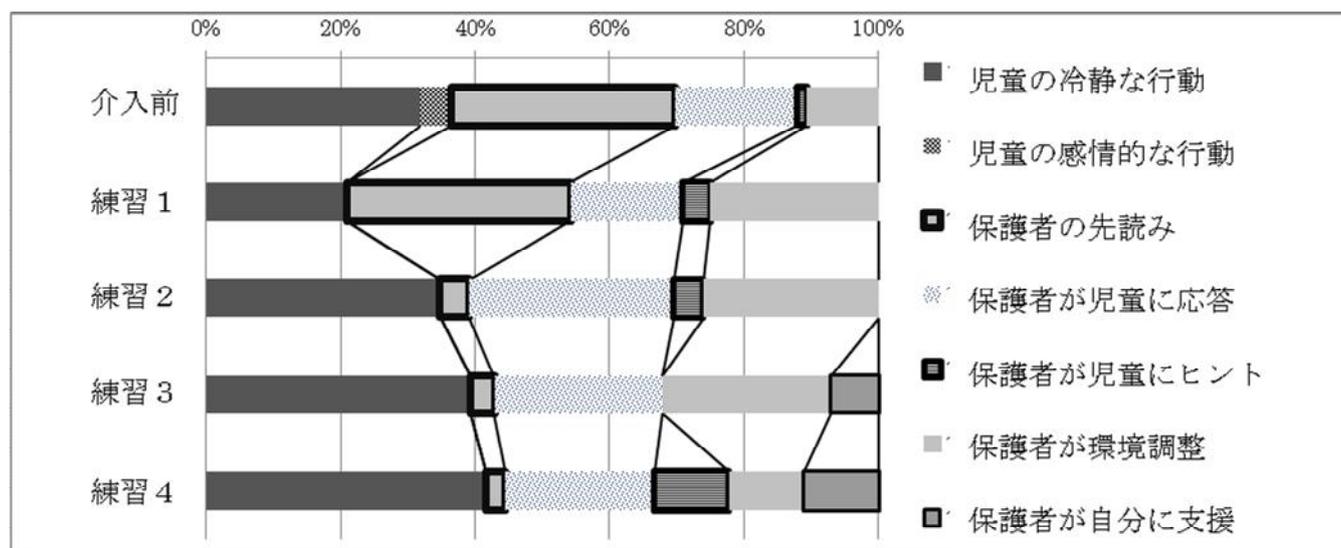


Fig.4 保護者のコミュニケーション練習の結果

振り返っての自己評価 【 総合自己評価・・・× 】

評価	内容
○	保護者の対応が上手くなった。
×	保護者の入れ替え練習という方法では、感想を述べ合うのみに留まる危険性がある。
△	教師と保護者が入れ替わり立ち替わりして練習する方法は少しの効果あり。
×	ノウハウ、ハウツーの習得に留まるため、生活場面で活用されることが少ない。
×	保護者の負担大。やる気と問題意識で支えられた活動である。
×	対応方法を身に付けたとしても、問題の根本の解決にはならない。
×	生活場面で児童が泣く回数が減るなどの直接的な効果はなし。

【活動②】生活場面での簡易語彙理解度チェックの実施

iPadのアプリ「Numbers」を用いて、児童に伝わらなかったと思う質問と伝わったと思う質問を、学校と家庭で記録していき整理を行った。その際に活用した記録表（Table.2、Table.3）は以下の通りである。

Table.2 本人に伝わらなかったと思う質問記録表（抜粋）

伝わらなかったと思う理由	聞いてみた質問
どちらにも返事するから	パソコンの近くに行く？それとも遠くに行く？
//	トマト食べる？食べない？
返事をした後、その通りにされると怒る	DVD 止めようか？

Table.3 本人に伝わったと思う質問（抜粋）

伝わったと思う理由	聞いてみた質問
よく聞いて返事をした	外に行く？ パソコンに行く？
//	ここにいる？ 教室に帰る？
返事をした後、その通りにしても怒らない	ビデオ消す？ つける？

整理の結果分かったこと

- ・理解できる単語の周辺にある文末表現は理解できていないことが多いということ。
- ・「何にでも返事をしてしまう」場面は、くせでもあり、その言葉を理解できていないということの現れでもあるということ。
- ・理解できている言葉は、「牛乳、ヨーグルト、ビデオ、寝る、パソコン、教室、お茶、外・・・」等の名詞理解であり、具体的なものについては語彙数が豊富であるということ。
- ・理解できていない表現として見られたものは「する/しない、出る/出ない、やりたい/やりたくない、いる/いない、行く/行かない、食べる/食べない」などの表現であるということ。

振り返っての自己評価 【 総合自己評価・・・〇 】

評価	内容
○	家庭にも連絡帳のように iPad を持ち帰り、同じテーマで記録していったこと
○	教師の判断と保護者の判断を、お互いの立場で比べながら見ることができること
○	実際に使える言葉で評価を進めていくことができること
○	「伝わる」「伝わらない」をどうやって判断するのかを保護者が考えられたこと
○	「一語文の理解」から、「この表現は伝わる、伝わらない」まで理解を進められたこと
○	iPad の活用ができれば、記録をしていくのに負担が少ないこと
△	「理解できている/理解できていない」ことの把握がなぜ重要なのかを伝える必要性
△	今までの家族の関わりの仕方が否定されたように感じることへの配慮 <ul style="list-style-type: none"> ・なぜ今までの方法ではいけないのか ・泣く場面が少なくなればそれで良いのではないか ・どうしてこれが問題なのか ・他の場面では困らないということはなぜなのか

【活動③】『どうして児童が理解できる方法で伝えなければならないのか』テキストの作成

児童の実態把握と活動①と②を通して、「理解できていない」方法で伝えたり選択したりしていたことが大きな原因の1つなのではないかという仮説を立てたが、保護者の方より「どうしてそんなことが必要なのか」「言葉が分かっているにもかかわらず、関わりかたは変わらないのではないか」との質問を受けるようになった。そのため、それに答える形でのテキストを作成し（Table.4）保護者に読んでもらった。AAC 関係の書籍を参考にし、児童の実態に合わせて具体的記述を混ぜて作成した。

Table.4 保護者に伝えるためのテキストの構成

項目	内容
叶わない選択肢を与え続けたら	<ul style="list-style-type: none"> ・空気をよむ子どもが育つ ・空気がよめない子どもはどうなる？ ・適当に答えられると、気持ちを聞き取れない
伝える場面と選択する場面の見分け方	<ul style="list-style-type: none"> ・なんでも選択させて良いのではない ・自立と選択の関係 ・伝えて待つということ
読み取りの間違いが引き起こす問題	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが「伝えられている」と勘違いする場面があること ・選択肢を準備した支援者が何をすべきか分からなくなるということ ～ツールはあるのに使えない～ ・子どもに正しい伝え方を教えられなくなる
選択ができるようになるということは	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの言いたいことを、支援者が想像する大変さが減る ・言葉を教えることで、プライバシーが保たれる ・支援者と子どもの間に「良い距離」ができる
上手く選択肢が準備できたとしても	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの言い分はある ・「言いたいことは何か」に費やしていた労力を「上手く言えていないこの子の気持ちは何か」ということにシフトする
発声の有無で答えるというテクニック	<ul style="list-style-type: none"> ・具体物の単語理解ができる段階の子どもにとって、「する／しない」など抽象的な質問に答えるのは簡単ではないということ ・「声を出す／出さない」という表現だけでも、いろいろなことが聞き取れるということ（Table.5）
子どもに伝えたいこと	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き方を工夫するから、しっかりと言葉を聞いて答えなさい

Table.5 発声の有無で聞き取れる質問内容

聞き取りたいこと	支援者が判断する方法
やりたいこと	1つの選択肢への発声があったとき
する／しない	声の有無で
行きたい／行きたくない	声の有無で
どちらでもよい／分からない	声を出さないとき
どちらも違う／言いたいことはある	声を出さないが、離れたら声を出すとき
迷っている	声を出すまで時間があつたとき
全部したい	全部に声を出す

【活動④】 分かる環境づくりの促進

リビングで泣いている様子について記録してもらった（Table.1）結果をみていると、コミュニケーション上の問題として背景が考えられるものが多かったのだが、それ以外にも児童が泣いてしまうことと関連するだろうと思われる事柄も見られた。そのような要素に対して一つずつ対応していくために、具体的な環境づくりについて提案し、環境を調整してもらった（Table.6）。

Table.6 環境づくりで行ったこと

児童の過ごし方の記録から抽出された要素	環境づくりへの対応
家族との過ごし方の調整	本人用の小さなテレビを準備してもらう
人を呼ぶことに慣れである	VOCA をいつでも押せるところに置く
周りの音に過敏に反応してしまう	無線ヘッドホンの使用
自分でビデオをコントロール出来ない	改造リモコンを活用しスイッチで操作する

振り返っての自己評価 【 総合自己評価・・・〇 】

評価	内容
○	問題点を指摘するのではなく、物の調整をすることで見えてくる児童の実態
○	一つ一つの機器を導入する際に目的をはっきりとさせることができたこと
○	コミュニケーションの練習に入る前にそれ以外の要因を減少させることができていたこと
△	過ごし方が少しは変わるが、やりとりの本質的な部分が変わるわけではないということ

【活動⑤】 聴覚を活用して選択することができるための「ショートムービー」の作成と施行

ア) 選択のポイントの整理

環境の整理や問題点の抽出が終わったところで、選択肢の提示方法についての介入を行うこととした。これまでの結果から、選択肢を準備する際に重要となるコミュニケーション上のポイントを抽出した（Table.7）。

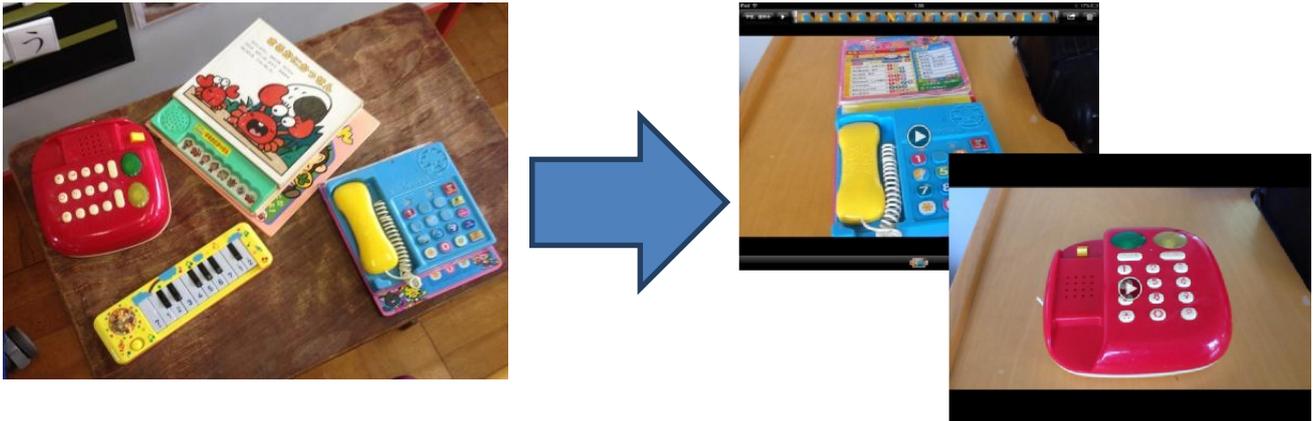
Table.7 児童にとっての選択肢提示のためのポイント

ポイント
・ 選択する場面は計画的に準備して、環境を整えてから練習する必要があること
・ 分かりやすい単語と分かりやすい表現を用いる必要があること
・ 選択肢を提示した後は、本人の表現を十分に待つ必要があること
・ 言葉を理解していないものも多く見られることから、実物を見せたりその音を聞かせたりすることも必要
・ 伝わらなかったと感じた場合には別の選択肢を準備する必要があるということ
・ 支援者は児童の反応から決して深読みせず、「確実に分かること」を用いてやりとりをしていくこと
・ 何度繰り返し聞いても支援者が「早く答えてよ！」という雰囲気を出さないこと

児童が選択肢に対して答える練習をしていくためにも、以上のポイントを押さえておくことは必須である。しかし、これらの項目を口頭や練習で伝えることは非常に難しいと考えた。そこで、これらのポイントを押さえたショートムービーを作成し、その動画を用いて選択する練習に取り組むことができるようにした。

イ) ショートムービーの作成

ポイントを押さえてショートムービーを作成した。iPadの基本機能である「カメラ・写真」を用いている。



iPad ショートムービーの構成

- ① 動画の始めに、何が写っているのか分かりやすく表示する
- ② 動画の始めに「その名前」をわかりやすい単語で示す
- ③ 動画の後半に、そのおもちゃの「音」を実際に鳴らす
例) おもちゃの音、ドアの音、水筒を開ける音など
- ④ 動画は一本10秒程度を目安に作成する
- ⑤ 選択する場所に応じて動画を整理する

ウ) ショートムービー活用の手順

ショートムービーを活用することで、選択肢を提示するときのポイント (Table.7) はとても身近なものとなり、保護者にとって受け入れられやすいものになった。その手順を Table.8 に示す。

Table.8 iPad に教わるように選択肢提示の方法を練習するための手順

手順
<ul style="list-style-type: none"> ・児童からの発信があったら、「iPad で選ぶ？」と聞く ・順に一つずつ動画を見せる ・児童からの発声があったら、それに応じる形でやりとりをする ・同じ動画 (5本ぐらい) を3回繰り返し見せても返事がなければ、違う動画に切り替える

エ) 準備したショートムービーのカテゴリー

保護者の協力を得てのべ300動画を作成し、35場面のカテゴリーに分けた。



代表的なカテゴリーの例	
学校 休み時間	学校 予定
朝起きたら	出かける前
外出先 (スーパー、郵便局)	買い物 (そうざい選び)
外出先での休憩	帰ってきたら
就寝前	待ち時間
音楽/DVD	誰とする

・対象児の事後の変化

活動⑤の実践を行った結果、以下のように多くの変化が見られることになった。

変化①・・・児童が選択肢を聞いて理解し、声を出して返事をするようになった。

変化②・・・児童が自分から声を出し人と呼ぶようになった。

変化③・・・選択する場所が増えた。

変化④・・・泣いて訴えることが減少した。

・事後の変化に関するエビデンス

ア) 学校場面でのコミュニケーションの変化

活動③④⑤実施前（9月）と実施後（12月）のコミュニケーションサンプル結果を比較した。

iPadのアプリは「Count Log」を活用した（Fig.5、Fig.6）。



Fig.5 9月の様子



Fig.6 12月の様子

イ) 家庭での泣き続ける回数の変化

家庭での泣き続ける回数を計測してもらい、活動⑤実施前（10月）、実施直後（11月）、導入2ヶ月後（翌年1月）の様子を比較した（Fig.7）。

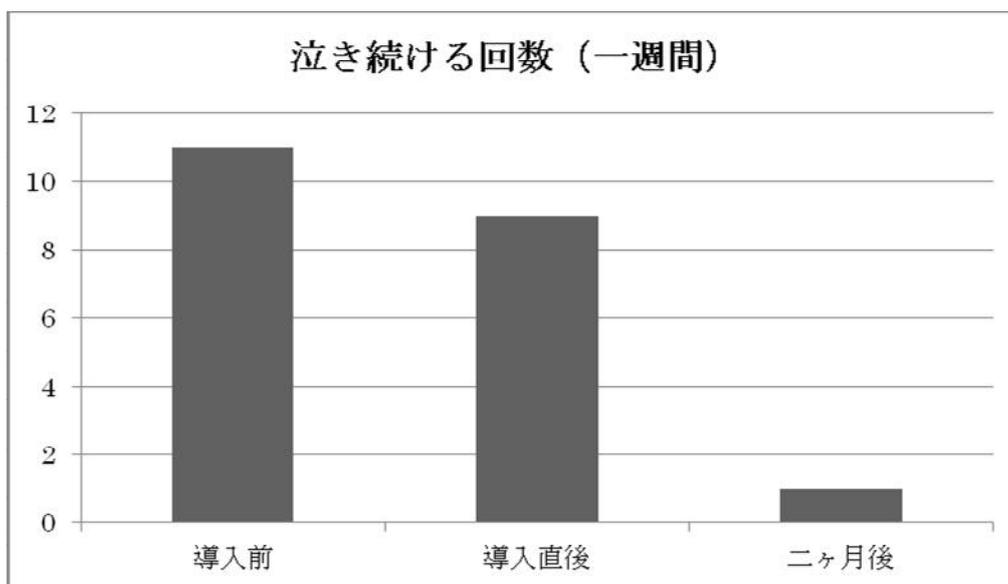


Fig.7 家庭（リビング）で泣き続ける回数

・考察

活動⑤で行ったショートムービーを活用した実践には効果があったと考える。画面をフリックして再生するだけという簡潔な手順で、選択する練習を児童と保護者がとに行うことができた。本事例のように、コミュニケーションのことで悩んでいる保護者は少なからずいるが、コミュニケーションが良い方向に変わるきっかけになるものはもしかしたら「伝わった」とか「この方法なら分かる」という実感や体験なのではないだろうか。本事例の保護者と児童は iPad のショートムービーを用いて練習することで実感できたのではないかと考えている。実感を得ることができれば、他の取り組み（活動①～④）で得られたことも意味をもって家庭にフィードバックされていくのではないかと考えた。支援者がこのようなコミュニケーションに悩む保護者に提案する際には、コミュニケーションの違いや便利さ、気軽さなどを実感できるコミュニケーションの手段を準備して実際的に何か変化が体験ができることを目指して支援を行うことが重要である可能性が示唆された。

視覚障害のある本児童のような子どもに対して、これまで選択肢を提示する方法が「絵カードか言葉」しか与えられてこなかったことにも問題があるのではないだろうか。本実践の児童の様子を見ることで「見て選ぶためのツール」「聞いて選ぶためのツール」「体験して選ぶためのツール」などという情報形態が異なる選択肢の準備方法の充実が今後重要になってくると思われる。

ツールが存在することで、この他にもいろいろな変化が見られた。まずコミュニケーションの順番が変わったことが大きな成果である。「支援者の問いかけに児童が答える」方法から「児童の発声を支援者が待つ」という方法に変わったということが重要である。支援者が待つことが基本となるやりとりの形になることで、児童がじっくりと選択肢の提示に対して考える時間を取ることができるようになったり、考えた末に返事をしないという表現ができるようになったりもした。これについても、「しっかり待つことが必要ですよ」という言葉以上に、iPad を用いることで自然に体験できたということが重要な要因であったと考えている。

本児童にとって、ショートムービーの活用は、「音声のデータに映像による説明がついている」ものである。そのため、支援者にとっては理解している言葉とそうでない言葉を見分ける際にも重要なツールとなった。つまり、『動画の一番初めの部分で返事するもの』『音声による言葉を聞いて返事するもの』『最後まで動画を見て、その音などを手がかりに理解して返事をするもの』と、児童の返事の仕方に違いがあったということである。このような視点は、児童の理解度を測るツールとして今後活用可能だろう。

実践を進めているときに、保護者はいろいろな感想を聞かせてくれたのだが、面白いと感じるものが多かった。「『選ぶ?』と聞くと不満そうなのですが、iPad で選ぶ?と聞くと喜んでいるようです。」「私が思っていた選択肢を選んで、長い時間楽しそうにしているんです。」「今までどうしてすぐに返事をしていたのでしょうか?」「普段の言葉のかけ方も変わりました。」などがそうである。保護者にとっても、児童にとってもコミュニケーションの手段や方法が大きく変わるときには「おや?」「あれ?」などという意外性や新しい発見が重要であろう。

今後はコミュニケーションの実態をしっかりと判断するノウハウをもち、それをツールとして準備してコミュニケーションの練習場面で活用し、支援者の負担が少なく「あれ?」「いつもと違う?」ということを児童とともに感じられるようなコミュニケーションの具体的環境を提案することができる教師になりたい。